

春と修羅研究 I

天沢退二郎編



宮澤賢宮書究九叢書

春と修羅研究

I 天沢退三郎
編

宮澤賢治研究叢書②『春と修羅』研究Ⅰ

編者——天沢退二郎

発行者——武田季男

発行所——株式会社學藝書林 東京都中央区八丁堀二丁目三十五 電話〇三二五二一五九〇六 振替東京一〇八二一

印刷・製本——東洋印刷株式会社

発行——一九七五年十月十日第一刷

© 1975 Tajirō AMAZAWA 1935-317508-1000

目次

宮澤賢治の詩	高村光太郎	—	7
『春と修羅』に於ける雲	草野心平	—	17
『春と修羅』への独白	栃ノ澤龍二	—	49
『春と修羅』私観	森荘巳池	—	84
無声慟哭（その解説）	草野心平	—	122
オホーツク挽歌（その解説）	草野心平	—	138
燻浄された原稿	宮沢清六	—	157

『春と修羅』初版について 小倉豊文——161

小岩井農場と種山ヶ原 串田孫一——177

黒い外套の男 恩田逸夫——181

『春と修羅』の序をめぐるつて 山本太郎——186

賢治詩の音紋—春と修羅—序— 長光太——198

解説 天沢退二郎——217

装丁 宮園洋

カバ、表の写真は詩篇「永訣の朝」原稿冒頭
部及び妹とし子肖像（女子大卒業アルバム用に
撮ったものという）。折返し部分は「永訣の朝」
原稿全。——『現代日本文学アルバム第十巻・宮澤
賢治』（学習研究社）所収の、宮沢家所蔵資料より——

『春と修羅』研究 I

宮澤賢治の詩

高村 光太郎

永訣の朝

けふのうちに

とほくへいってしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふっておもてはへんにかかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいっそう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふってくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い蓴菜じゆんさいのもやうのついた

これらふたつのかけた陶椀たわんに

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがったてっばうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

蒼鉛そうえんいろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになって

わたくしをいっしゃうあかるくするために

こんなざっばりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまっすぐにすすんでいくから

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたぎれのみかげせきさいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまっしろな二相系にさうけいをたもち

すぎとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらうていかう

わたしたちがいっしょにそだってきたあひだ

みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Ora de shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのとざされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまっしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそれから
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなゝよにうまれでくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまここからいのる

どうかこれが兜卒とまぢの天の食に変わって

やがてはおまへとみんなとに

聖い資糧しじりょうをもたらすことを

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

松の針

さっきのみぞれをとってきた

あのきれいな松のえだだよ

おお おまへはまるでとびつくやうに

そのみどりの葉にあつい頬をあてる

そんな植物性の青い針のなかに

はげしく頬を刺させることは

むさぼるやうにさへすることは

どんなにわたくしたちをおどろかすことか

そんなにまでもおまへは林へ行きたかったのだ

おまへがあんなにねつに燃され

あせやいたみでもだえてゐるとき

わたくしは日のとてるところでたのしくはたらいたり

ほかのひとのことをかんがへながらぶらぶら森をあるいてゐた

(ああい い さっぱりした

まるで林のながさ来たよだ)

鳥のやうに栗鼠リスのやうに

おまへは林をしたってゐた

どんなにわたくしがうらやましかつたらう

ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ

ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか

わたくしにいっしょに行けとたのんでくれ

泣いてわたくしにさう言ってくれ

おまへの頬の けれども

なんといふけふのうつくしさよ

わたくしは緑のかやのうへにも

この新鮮な松のえだをおかう

いまに雫もおちるだらうし

そら

さわやかな

ターペンタイン
turpentine の匂もするだらう

こんなさまことの籠つた、うつくしい詩が又とあるだらうか。この詩を書きうつしてあるうちに私は自然と淨らかな涙に洗はれる気がした。これは妹の死を書いた、岩手県花巻の宮澤賢治といふ日本に珍らしい立派な詩人の詩である。殆ど世に知られず彼自身も亦既に死んでしまつた。

この詩の中の括弧の中の文句は妹の言葉とその花巻なまりのまま挾んだのであつて、「あめゆじゅとちてけんじゃ」は「雨雪を取つて来てください」、「おらおらでしとりえぐも」は「私は私で独り行きます」、「うまれでくるたて云々」は「また人に生れてくるとしても今度はこんな自分の事ばかりで苦しまない様に生れてくる」の意味である。地方の生きた言葉が如何に美しく力強く、又比例正しく扱はれてゐるかを此の場合見ねばならぬ。さうしてこの地方の言葉が生きてゐると同程度に彼の詩語全部が生きてゐる。内面から湧き出してくる言葉以外に何の附加物もない。不足もないし、過剰もない。どんな巧妙な表現も此所では極めてあたりまへでしかない。少しも巧妙な顔をしてゐない。此の事は詩の極致に属する。此等の詩は或る十一月の末二十五歳で永眠された妹さんに対する詩人の慟哭であるが、詩の世界に於ては慟哭さへも斯の如く清浄の氣に満たされるのである。陰惨が書いてあつてしかも其を貫き破る光である。「松の針」の中で死に瀕する妹さんが兄の採つてきた松の枝に触れて喜ぶくだりの崇高の美は、「ああい、さっぱりした まるで林のながさ来たよだ」といふ妹さんの素朴な言葉に到つて殆ど天上のものに類する。

宮澤賢治といふ詩人は明治二十九年八月一日岩手県花巻町で生れ昭和八年九月二十一日同じ町で病にたふれ、僅に三十八年の生涯しか有たなかつたが、その一生は実に稀に見る規模の大きい、複雑多面、豊富玲瓏のものであつた。彼はもと農林学校に地質土壤肥料の学を修め、郷里の農学校の先生となり、実験指導や土性調査の事に従つてゐた熱心な自然科学者であり、後花巻町の郊外に羅須地人協会といふものを開設し、自ら農耕し、肥料設計事務所を県内数個所に設けて、あまねく農民の為に農事相談を無料で行ひ、東奔西走、農民と共に喜び、共に憂ひ、或時は東北碎石工場の技師ともなり、足を棒にして郷土の「土」に終始した実

際家であつたのである。彼は龐大な夢を有ち、眞の意味に於ける科学者の魂の所有者であり宇宙自然の機微に参入し、殆ど無我の大にまで到達した一個の全球体を成す人間であつた。かかる人間が又幸にも言葉の世界に異常な才能を持つて生れたのである。朝から晩までの繁忙の生活の間に彼はいつでも手帳を懐にし、鉛筆を首にぶら下げて歩きまはり、青空の下、物置の隅のきらひなく、心象の湧き起るままに其を言葉にした。言葉にしては歌つた。其処にまつたく新らしい詩の一種族が期せずして生れた。しかも多量多産、まるで一粒万倍の勢で書きつくした。詩篇、和歌、童話、寓話、劇、その数は数へきれない。死後整理されて三冊の全集に収められたのは僅に五分の三にも満たない有様であつた。しかもその作の眞価の發揚はすべて未來に屬する。此処に埋藏されてゐる美と眞理とはまだ世人の眼と理解とに十分に届いてゐない。宮澤賢治の全作品は今日以後日本の詩文の誇としてあまねく人に味読されねばならないのである。『宮澤賢治全集』三冊は東京で出版されて居り、其他に『注文の多い料理店』と題する童話集も既刊されてゐる。明治以來綿々たる、藤村、有明、白秋、犀星、朔太郎等一連の詩的概念は、宮澤賢治に至つて強ちに急転回されたといつていい。詩は全く新生面を以て此所に立ちあらはれた。新日本の娘達に日本の詩について語れといふ依頼をうけて、敢て此の無名に近い一詩人について私が語るのには、過去よりも未來に多く実りを持ちたいといふ私の心に外ならない。此の詩人の死後、小さな古い手帳の中に書き残された言葉があつた。その為人を知るに最も好適なので此処に採録して置く。